

**立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトⅡ（教員・学生参加型） 2015年度研究成果報告書**

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	コミュニティ政策学科・2年	向山沙良
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ政策学科・教授	河東仁
研究課題	東日本大震災被災地に対するエンパワーメントに関する研究	
プロジェクト 分担者	向山沙良・浅井映・中村亮介・三上愛・宮路萌・松澤優里	

プロジェクトの内容及び成果の概要

プロジェクトの内容は以下の2点である

- ・被災地から離れた場所で開催されるお祭りに参加、被災地の一つである南三陸町の魅力を伝えること。
→埼玉県北野2丁目にて開催される「きたにフェスタ」・立教の学園祭「IVY フェスタ」に参加、主に食を通じた南三陸のPR活動を行った。
- ・被災地に赴き、現地の方々との交流を通して被災地を観光地としての魅力の発見を行う。
→プロジェクトメンバーにて南三陸町を訪問、現地の方々との交流を深めた。

これらの内容から得られた成果は以下のとおりである。

- ・南三陸町を第三者の目線で見ることができた。
被災地である南三陸町を観光地として紹介するという使命の元現地を訪問すると、今まででは見えなかった南三陸の魅力や現状での問題点、また震災の復興による新たな弊害を見つけることができた。今まではボランティアとして訪問したため、ボランティアが必要な地域としては遊ぶ設備も整いつつあり、楽しい地であったが、遊ぶために行くとなると交通の問題等も含めまだまだ未発達な部分があることを実感した。一方で新たに個性的な店を発見するなど、魅力的な場所が新たに作られ続けていることも確かであると確信した。
- ・南三陸町での震災後のコミュニティづくりの変遷を垣間見ることができた。
現地の方々との交流の中で、一度震災によってバラバラになったコミュニティが再生していく様子を垣間見ることができた。このプロジェクトで見られたコミュニティの再生には2つのパターンにわけられると考えられる。一つは、仕事によってできるコミュニティだ。漁師の方々には、震災前からあった繋がりを使い、共同で船を買うことで漁を続けることができたという。さらには、飲食店では、商店街の中で組合ができ、新たな活動のために団結している。また、震災の記憶を和らげるために立ち上げられた仕事によって新たなコミュニティが作り上げられる例も見られた。このように、仕事には人と人を繋げる作用があるようだ。もう一つは、住む場所によって作り上げられるコミュニティだ。震災によって家を失った方々が仮設住宅に避難をし、そのまま現在まで仮設住宅に住み続けている方が多くいる。そのため、近隣の住民同士で集まり、集会所でお茶を飲むことでコミュニティが再編されたようだ。現在では、今のコミュニティから離れることがさみしい為に、仮設住宅から出ることを渋る方もいるようだ。このような事例から、二つのコミュニティの再生の様子を垣間見ることができたと感じた。

以上が本プロジェクトの内容と成果である。